

今からおよそ 22 年前、やまなみ工房にやってきたのは平成 11 年、井上優さん 55 歳の暑い暑い夏の日。

初対面、あいさつ代わりに無言で手渡された一枚の紙きれには前職、土木作業員とだけ書かれていた。

くしゃくしゃに目を細める穏やかな笑顔。

小さな体から到底想像の出来ない強靱な肉付きと分厚い掌はこれまでの歴史を物語る。

知的に障害があろうとも、井上さんは生まれ育った地域でシャベルを片手に汗を流し、これまで働くことに文句ひとつ言わず長年道づくりに精を出していたようだ。

目の前に役割がある、誇るべき仕事がある、何より必要とされていた井上さん。しかし残念なことに不況の煽りを受け、ご本人の意思に関わらず生活は一変した。

行き場をなくした井上さんを迎えることとなった入所当時のやまなみ工房は今とは景色も随分と違い、整地もされず敷地内のあちこちに砂利が山となっていた。

少しの風でも息を止めなければならないほどの砂埃、井上さんは誰に頼まれるわけでもなく腕まくりをした。

再びシャベルを手に費やした数日間、敷地内のでこぼこが見違えるように消えようとしていた時、少し打ち解けたと感じた井上さんにふと尋ねてみた。

「これからは何のお仕事がしたいですか？」

間髪入れず「おおきに」と片手を挙げた横顔はくしゃくしゃの笑顔で答える「喫茶店やな」。

以来、井上さんは自分の夢を叶え、15 年の間、ごつごつとした働くその手で美味しいコーヒーと真心を毎日お客様に届けたのだ。

いつしか地域に根差し、愛され続けた喫茶店。

ただ、やまなみ工房もまた時代や制度の流れとともに変化を強いられ喫茶業務を縮小せざるを得なかったのは井上さん 70 歳、新年度で活気づくはずの春の日だった。

言葉で多くを語らない。それでも本心は悲しかったに違いない。

「これからは何のお仕事をしたいですか？」、今度はそう聞かれることもなく、年齢も年齢、しばらくはゆっくりしまししょう的な薄い期待感が漂う先に身を置いたのは、数人の仲間と画材の揃ったアトリエだった。

想像ではあるがこれまでの 70 年間、絵など描いたこともないだろう、もちろんまともな美術教育を受けたこともないだろう。それでも働くことを止めない井上さんは何かせねばと自ら鉛筆を削りだしたのだ。

誰かに求められたわけでも、指示を受けたわけでもない。

井上さんは小さなはがきサイズから始まり A4 のコピー用紙は四つ切の画用紙に姿を変え、7 年経った今では床に敷いた 2m×1.5m の大きな紙に向かい、朝から 1 時間、午後から 2 時間、一日も休むことなく毎日描き続けている。

表現するのは人や動物、生まれ育った家や土木作業員時代の道具も現れる。

井上さんが絵を描くなどと誰が想像しただろう。巨大な作品の数は遂に自分の年齢の 2 倍を超えた。

いつの日だったか僕たちが活動をする甲賀市内の小中学校全ての校長先生が施設見学に来てくれた。僕からすれば見るからに THE 先生のその集団に苦手意識が働いたのは言うまでもない。

実はその日、校長先生の集団が最も足を長く止めたのは井上さんの場所だった。

名刺も持たない、役職もない、字を書くことも計算をすることも苦手な井上さんは授業で教壇に立つこともない。その井上さんの背中を見つめ、指先を見つめ、絵を眺める校長先生たち。

同世代ではあるもののまるで違う山が対峙するようなその光景はほんの数分、正確に言うと数秒が長く感じたのかもしれない。1対大勢のその光景、井上さんに動揺は微塵もない。

そして、静粛の中に響いた一人の校長先生のため息交じりの声が周りの校長先生の同意を促した。

「私らもっと頑張らないと。もっと目の前の仕事を好きになって一生懸命頑張らないと」。

そしてこう続けた、「もうすぐ定年、そう思ってどこか楽に終えよう、事なき終えようとしてるわ。井上さん見てたら自分が恥ずかしく思えてきたわ。まだまだこれからや。自分にも可能性があるはずや。私らもっと頑張らないとな」と。

多くの子供たちを、その子供たちを教育する先生たちを指導する立場の校長先生の気持ちを激しく揺さぶった井上さんの姿にしめしめと思いつつ、その発想に辿り着く校長先生の感性からも多くを学ばせていただいた瞬間だった。

今日、倉庫に保管された200枚近くある巨大な絵を前にあらためて井上さんが辿ったこれまでの軌跡に敬服した。

その絵を前に僕は思う。

「障害があるのに、美術の教育も受けていないのに、70歳で初めて絵を描いたのに、有名な展覧会に出展して、鉛筆一本で毎日大きな絵を描くお爺さん」。そうじゃない、井上さんが凄いのはそんなことじゃない。

井上さんはモノを大切にする。人を大切にする。見返りを求めない。損得で判断しない。困っている人がいれば助ける。他人の幸せを自分の幸せのように思う。自分も相手も肯定する。人のために力を出す。出来ないことを悔やんだりしない。人を羨むことをしない。人を責めることなどしない。何年歳を重ねようとも目の前のすべきことに情熱を燃やし自身の気持ちが枯渇することがない。そして後悔しない、落ち込まない。

若かりし頃毎日手にしてたシャベルを今は鉛筆に持ち替えて、井上さんは今日も道を作る。その道は人として守るべき大切な人道。僕は絵のことはちっとも分からない。

ただ、心からそう思う。井上さんのような人間になりたい、井上さんのような生き方を目指したいと

。